



D

Development

E

Education

A

Association

R

Resource

DEAR News

ディアニュース

153号 開発教育協会



愛知淑徳大学准教授

# 小島祥美さん

## 多文化共生のまちづくりを目指して

日本にいる外国籍児童には法的な就学義務が無く、学校に行けない子どもたちもいる。学校に通い始めても居場所が無く中退する子や、高校進学をあきらめてしまう子も多い。最近までは行政もその実態を把握していなかった。今回は、1990年代後半から在在外国人児童の不就学問題に取り組んできた小島祥美さんにお話を伺った。

### 外国籍児童との出会い

ボランティア活動や生徒会活動など活発な学校生活を楽しんだ小島さんは、「先生や友人など周りからの支えがあって学校生活を充実してすごすことができた。子どもたちを応援するために学校の先生になりたい!」と、1994年埼玉県内の小学校の先生になった。教室には東南アジア、南米などから来た児童がいて、コミュニケーションすらままならなかった。

家庭訪問をしてご飯をご馳走になり、出身国での生活の写真を見せてもらうなど、児童とその家族との交流を通じて、日系人や出稼ぎ労働などの彼らの来日の背景に初めて出会った。小島さんは「これらのことを知らないで『先生』と呼ばれていることが恥ずかしく感じた。学校の中の見えない壁をなくして子どもたちが喜んで通学してもらうには、私とその背景をきちんと

と理解したい」と、大学で勉強し直すことを決意する。夜間大学でスペイン語を学び始めた小島さんは、子どもたちの出身国を訪ねてみようかと南米をバックパッカーとして訪れた。行く先々で、日本のこと、特に直前に発生した阪神淡路大震災のことを尋ねられ、自分が日本の事情に無

知なことを再認識させられた。帰国後は神戸に向かい、被災外国人支援をはじめ、多言語情報発信の活動に参画した。そんな中、神戸市内のアパートで10人もの外国人不就学児童と出会う。衝撃を受けた小島さんは、行政担当者に「子どもたちを学校に行かせてあげたい」と訴えたが回答は「就学義務が無いので、対応が難しい」。国際協力で「途上国」の子どもたちの支援も大事だが、足元の在在外国人不就学児童をまず学校に通わせるにはどうすればいいのかと、悩みを深めた。

### 社会から「見えない」子どもたち

国をはじめ、自治体では外国人児童の就学実態を示す統計が無く、不就学の子どもは社会から「見えない」子どもであった。そのため、外国人の教育保障を目的とした体制構築のためには、単なる事例紹介ではなく、不就学率などの根拠あるデータで実態を明らかにすることが重要だと感じた。「一つの自治体に暮らす外国籍児童のすべての家庭に行き、直接会って話せば就学状況がわかるかも」と思い、いくつかの自治体に相談した結果、岐阜県可児市\*から協力が得られることとなった。

2003年4月から、市内で最も多くの外国人労働者を雇用する企業の社宅に移り住み、市教育委員会や国際

●小島祥美(こじま・よしみ)  
愛知淑徳大学 文学部准教授

1994年公立小学校教員時に外国人児童との出会いから、南米一人旅へ。帰国後は、神戸市内で外国人住民の支援にかかわる活動(NPO法人たかとりコミュコミュニティセンター内、事務局長)やコミュニティビジネス(NPO法人多言語センターFACIL)に参画。こうした活動のなかで、学校に通ってない不就学の外国人の子どもと出会い、不就学の問題を初めて知り、現状を変えたいと強く決意する。

2003年4月から岐阜県可児市へ転居し、全家庭訪問調査による外国人の子どもの就学実態調査に行政・民間団体等と協働して進む。全国で初めて外国人の就学実態を明らかにしたことから、2006年4月より可児市教育委員会の初代外国人児童生徒コーディネーターに抜擢され、不就学ゼロをめざした施策を地域と連携して実践活動を行う。2006年9月に愛知淑徳大学教員兼任し、2011年4月より現職。

2006年3月に大阪大学大学院にて博士号(人間科学)取得。愛知県小牧市多文化共生協議会委員(委員長)、愛知県「プレススクール実施マニュアル検討会議」委員(コーディネーター)、NPO法人可児市国際交流協会理事(兼運営委員)なども務める。

\*岐阜県可児(かに)市:岐阜県中南部に位置し、名古屋市および県庁所在地の岐阜市からは30km圏内。南部は県下最大級の工業団地。総人口約10万人のうち約6,000人が外国人住民。

# KOJIMA Yoshimi



南米一人旅 (1996年ボリビアにて)



グアテマラで子どもたちと折り紙  
(2000年グアテマラにて)



日本から帰国した子どもたち  
(2010年ベルギーにて)



交流協会などと協働して調査を開始した。外国人住民が困っていることの相談に乗りつつ、学校への通学の有無、通学していない場合はその理由などを家庭訪問で調べる。2年間に同じ調査を3回実施した。

事前に市の広報やエスニックショップ、カトリック教会、外国人雇用企業、民族団体などを通じて周知を行ったこともあり、調査はスムーズに実施され、拒否されることはほぼ無かったという。「小島さんは収入がなくお腹が減っているらしい」と、お国の料理を用意してくれる家庭も出てきて、楽しく調査に取り組めた。

## 外国籍児童の不就学ゼロを達成

調査の結果、多様な就学状況のみならず、学校に通っていないかたり、途中でドロップアウトしたりする子どもが数多くいる実態がわかった。小島さんは調査報告会を行政や企業、調査対象者の外国人住民など対して実施し、①実態調査で培われた行政・教育委員会・企業・NGOなどのネットワークの活用、②不就学をなくしていくためにそのネットワークを活用したコーディネーターの採用、③市の職務規定に外国人児童就学担当の明記および外国人児童の学習保障事業の文章化、などを提言した。

そして、05年度、小島さんが市職員としてコーディネーターを担当することを条件に、可見市が動いた！市長の「外国人児童の不就学ゼロ宣言」により、小島さん自らがコーディネーターとして外国人児童に学ぶことの楽しさやその意義、卒業後の進路などを教えることから始め、学校や地域と連携して外国人児童に「自信」を持つためのプログラムも作った。不就学の子どもが教育委員会の窓口を訪ねるようになり、「現状を変えるための調査だとわかってもらえた！」と嬉しかった。メディアの協力もあり、外国人児童の頑張る姿も広く地域住民に伝わっていった。

こうして地域、行政、学校が力を合わせた結果、1年後には学校をドロップアウトする子はゼロになり、外国人児童全員が目標を持って中学を卒業するようになった。全国の自治体からの視察者の殺到は、実践者の励みにもなった。可見市などの実績により、文部科

学省では外国人児童の就学実態調査が事業化されるなど小島さんの活動は、国を動かすまでになった。

## CCCでの活動、そして…

全国の子どもの就学が保障される体制を構築していきたいと考えていたちょうどそのとき、愛知淑徳大学で、学生が学外で生きた学びを得られるように支援する組織としてコミュニティ・コラボレーションセンター (CCC)\*\*を開設するので手伝ってほしいとの声がかかった。小島さんは、これまでのネットワークを生かせる仕事として06年9月に移籍を決めた。

現在は「入門ボランティア」「サービスマスター」などの授業を担当している。「最初の授業では学生は身構えているのですが、NPOや企業の方々などの熱意を理解すると次第にボランティア活動に積極的になっていきます。協働した地元企業からは『社員の活性化につながる』との評価もいただいています」

今年4月からは文学部教育学科の准教授となり、CCCの活動に加えて、小学校教員養成課程も担当することになった。「大学時代に地域で多分野での専門家やNPOなどとのネットワークを築いて、教員になって困ったときに自分一人で抱えようとせず、学校外の人材に頼れる関係を作ってほしい。たくさんの経験や体験から実社会を伝え、生きた学びを実践できる小学校教員になってほしいです」

小島さんは、外国人児童の支援にも継続して取り組んでいる。08年秋以降の景気低迷で外国人労働者の派遣切りが横行し、学校に通えなくなったり、将来に夢を描けなくなったりした子どもが増加している。そうした子どもたちを応援する活動として最近、①大学に外国人の親子を招待して将来を考える場づくり、②「私のフォトストーリー」と題した映像作りのワークショップを通じて自分の好きなものや将来の夢を表現することでアイデンティティへの自信づくり、③外国人学校に通う子どもの健康を守る環境づくり、など、主にこの3つに取り組んでいる。エネルギッシュな小島さんの活動範囲は今後も拡大していきそうだ。

(取材・文：田中祥一、須磨珠樹、阿部秀樹)



大学生が企画し小学生と校区を歩きながら環境によいところをみつけるグリーンマップづくり (2009年度～現在)

\*\*愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター (CCC)：学生が学外のさまざまな地域のコミュニティに能動的に参加交流し、地域とともに活動しながら、実践的な生きた知識や技術を学ぶことを支援する教育組織。愛知淑徳大学生の5人に1人がボランティア活動に参加するなどCCCは学生の地域社会での実践活動に寄与しており、地域社会や地元企業から大学と地域社会をつなぐ活動として高い評価を受けている。学生一人ひとりがアイデアを活かして活動の企画・運営に携わり、現場での実践を通して環境問題への理解を深めている社会貢献の実践は、2010愛知環境賞優秀賞受賞へも繋がった。学生有志による社会貢献活動を支援するチャレンジファンドも用意され、やる気のある学生をサポートしている。  
<http://www.aasa.ac.jp/institution/cc/>